

誘引力、反発力、均衡化力、そして強度

ドゥルーズ＝ガタリの「無器官体」上に展開する諸力を
システム学的かつ図式的に解釈する一つの試み

黒石 晋

(滋賀大学 経済学部 社会システム学科)

キーワード：無器官体、飽和体、欲望機械群、器官諸機械、誘引力、反発力、均衡化力、強度、主体

1. 緒言

筆者はこれまで、「社会のシステム学」の立場から¹、ドゥルーズ＝ガタリの「欲望」「欲望機械群」「リゾーム」…等々に立脚する新たな社会理論を追求してきた。それは、閉鎖系の均衡システム論（現代経済学の主流である一般均衡理論はその典型）にあきたらない筆者が、動的システム学を代表する「サイバネティック・システム」と「シナジェティック・システム」という二つの既存の——そして相互に独立・背反の——システム形式を架橋するため、その中間に欠落している、したがって存在すべき第三のシステム形式（それを筆者は「リゾーミック・システム」と仮称してきた）を模索し探究するために、彼らの思索を応用できると考えてきたからであった²。

表題に記した〈誘引力〉、〈反発力〉、〈強度〉、…等々の概念は、ドゥルーズ＝ガタリのいう「無器官体」（＝器官なき身体）の上で「欲望機械群」を構成する「器官諸機械」が作動するメカニズムを表現する、動的システム学の「鍵概念」であり、リゾーミック・システムが立ち上がってゆくうえでの最初の重要な機序をなすものと考えられる概念である。筆者はすでに拙稿（2016）「リゾーミック・システムの編制原理³」において、これらの概念に多少の検討を加えた⁴が、本稿においては、さらに踏み込んで、これらを「システム学的」

1 「システム学」とは“systemics”の和訳。なぜ筆者が「システム学」といい「システム論」といわないかについては今田・鈴木・黒石編著『社会システム学をめざして』（ミネルヴァ書房、2011年）を参照。特に、1980年代から今日に至るまで、理論社会学において「社会システム論 Social Systems Theory」といったとき、N. ルーマン（1927-98）のそれを想起する論者が多いことに対する配慮でもある。筆者の思索はルーマンの思想系列にまったく属していない。

2 拙著『システム社会学』（ハーベスト社、1991年）、第2章（特に53頁）、および日本社会学会・理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』（丸善出版、2017年）、に所収の拙稿「リゾーミック・システム」の項目を参照されたい。

3 『彦根論叢』No. 407、20-35頁。以下これを「既出拙稿（2016）」と記す。本論考はネット上でPDF閲覧可能である。

4 既出拙稿（2016）、24-25頁。

かつ「図式的」に関連づけることを試みてみたい。なお、本稿での試みはあくまでもきわめて限定的なひとつの解釈であることをあらかじめお断りしておく。

2. 図式的把握

誘引力、反発力、均衡化力、そして強度

ドゥルーズ＝ガタリは主著『アンチ・オイディプス』の中で、鍵概念のひとつである〈強度〉の由来について以下のように記している：

… では、これらの純粋な強度はどこからやってくるのか。これらは先行する反発力と誘引力という二つの力に由来し、この二つの力が対峙するところから生まれてくる。だが、もろもろの強度そのものは相互の対立の中で中立状態の付近に均衡（平衡）するのではない。それどころか、それらの諸強度は、無器官飽和体を示す「強度＝ゼロ」の状態から発動して、すべて正の値をとる。ただしその値は、諸強度自体の複雑な関係に応じて、また強度の原因となる誘引力と反発力の比率に応じて、相対的に上下する。要するに、誘引力と反発力の対抗は、すべて正の値をもった、強度の諸項からなるオープンな数列⁵を生み出す。これらの諸項は、決してひとつのシステムの最終的な平衡状態を表わすものではなく、むしろ無数のメタ安定的な定常状態を表現していて、ひとつの主体は、次々とこの個々の状態を体験し通過してゆくのである。 [AO, pp. 25-26 拙訳⁶]

この文章を、以下〔引用文 A〕と呼ぶことにしよう。私見によれば、この文章は短いながらも、ドゥルーズ＝ガタリの著作中「誘引力、反発力、均衡化力、…」等々の概念間の関係をシステム学的に解釈する上で、最も重要な手がかりを有する箇所である。本稿は以下、

5 原語 *série* は数学用語としては「級数」であるが、ここではあえて「数列」とした。「級数」ないし「系列」という訳でも構わないだろう。なお「数列」ならば本来は *séquence* である。

6 Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti Œdipe*. Minuit, 1972 (以下本書を AO と略記する), pp. 25f. 『アンチ・オイディプス』市倉訳 (河出書房新社、1986 年) 32-33 頁、宇野訳 (河出文庫・上下二巻、2006 年) 上巻 45 頁を参考にさせていただいた。訳語を変更した箇所は、主に「システム学的観点」からの配慮による。具体的には、市倉・宇野両訳の「器官なき充実身体 *le corps plein sans organes*」を「無器官飽和体」に (以下「注 14」を参照)、「反発 *répulsion*」を「反発力」に、「吸引 *attraction*」を「誘引力」に (以下の「注 15」を参照)、それぞれ変更した。この二者は、この文中ではドゥルーズ＝ガタリ自身が「二つの力」と呼んでいる「力」である。また「〈強度＝ゼロ〉の状態を起点として *à partir de l'intensité = 0*」を「強度＝ゼロ」の状態から発動して」に、「準安定的 *metastable*」を「メタ安定的」に、「停止状態 *états stationnaires*」を「定常状態」に変更した。この“*metastable*”の語は、近年の複雑システム学ならば“*robust*” (強靱) の語で形容される状態だと思われる [複雑系理論における“*robust*”の語の用法については、今田・鈴木・黒石編著『社会システム学をめざして』(ミネルヴァ書房、2011 年) 42-43 頁を参照] が、1972 年の AO 出版当時には、“*robust*”のこの形容法はなかったと思われる。またシステム学では、「定常状態」は「停止状態」を表す語ではなく、「動的な流れが定期的に一定のパターンを描いているような状態」をいう [例：ベナール対流の強靱で定期的な六角形パターン]。これらの訳語の変更の意図については既出拙稿 (2016) の 22-24 頁をも参照していただきたい。なお、これらの原文を本稿の最後に「付録」として示してある。参照いただければ幸いである。

この短文を集中的に解釈することに費やされることになるのだが、まず最初に、ドゥルーズ＝ガタリが「これらの諸項は … ひとつのシステムの … メタ安定的な定常状態を表現して」いると記していることを確認しておきたい。つまりこれらは「システム学の構成概念」として解釈する余地が大いにあることを示唆しているからである。

それにしてもこの箇所は、一読して不可解な表現をいくつも含んでいる。反発力と誘引力の対立は、なぜ「均衡」をもたらさないのか。そしてそれはなぜすべて正の値をとる（負の値やゼロ値をとらない）のか。「オープンな数列」とは何を意味するのか。平衡状態とは異なる「メタ安定的な定常状態」とはいかなる状態のことなのか、… 等々。以下、こうした疑問をシステム学的に解決することを意識しつつ、解釈を進めよう。

図式的解釈

まず、上記〔引用文 A〕に現れる諸概念、特に〈強度〉、〈誘引力〉、〈反発力〉の関係はどのようなのだろうか。以下に、その図式的解釈を試みよう⁷。その解釈の候補として、まず「図 1」をご覧ください（ただし、「図 1」にはドゥルーズ＝ガタリの術語体系にはあらわれてこない〈均衡化力〉という概念を追加している。これは〈均衡〉という「状態概念」に対して、〈均衡〉に向かう「過程概念」を補うためのものである⁸）。

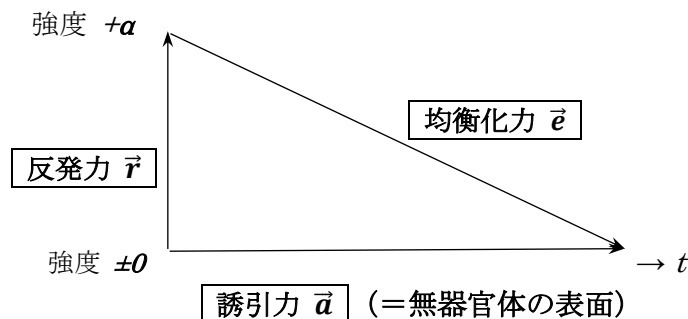


図 1：誘引力、反発力、均衡化力の三者関係

この図は、誘引力 (**attraction**; \vec{a})、反発力 (**repulsion**; \vec{r})、そして均衡化力 (**equilibration**;

7 筆者は、システム学的観点から見たとき、(1972 年に AO が発表された当時の) ドゥルーズ＝ガタリの言説を「完成した思想体系」と見るべきではないと思っている。それはむしろ理論的に未完の状態にあったのであり、彼ら自身「いいたいことをうまくいえない」という「まだるっこしさ」を抱えていたのではないかと思う（また複雑系に関する知見も当時は乏しく、システム学の側も未熟だった）。いささか不遜に響くかもしれないが、それらを最新のシステム学的知見によって補完するのが筆者のなすべき使命なのだ、と考えているのである。

8 〈均衡〉状態と〈均衡化〉過程とを峻別すべき意義については、既出拙稿 (2016)、24-25 頁を参照されたい。

e) の三者⁹を「力関係」として図式的に解釈し、かつ簡潔に例示したもので、当の三者は上図の直角三角形の3辺に例えられている¹⁰。そしてこれら三者は「ベクトルの式」として、

$$\vec{e} = \vec{a} - \vec{r}$$

という関係になっていることを確認しておきたい。実はこの \vec{e} こそが、システム内で実際に発揮される力（生産力）となるものである¹¹。

図式の意味的解釈

この図あるいは式の意味を、あえてコトバによって解釈するなら、その三辺は、

- ① 本来的かつ根元的・普遍的・先在的な力である \vec{a} の誘引力に対して、
- ② たまたま \vec{r} の反発力が作用し反抗したとき（誘引力に挑戦したとき）、
- ③ \vec{a} と \vec{r} との相互関係の力の差の中から \vec{e} の均衡化力が副次的に生まれてくる、

という力関係を示している¹²。ここで、〈誘引力 \vec{a} 〉とは、すべての力に先立って存在している、宇宙的な力、普遍的な力である（後述するように、それは「時間の経過」そのものといってよいものである）。

これに対して〈反発力 \vec{r} 〉というのは、そうした既存の〈誘引力 \vec{a} 〉に抗って、システムに「エネルギー」を注入する力である¹³（したがってそれは、システムを「エネルギー論的開放系」に仕立て上げる力となる）。この〈反発力〉は、生命のシステムでいえば、均衡状態（＝死）に抗して化学エネルギーの力をシステム内に注入する営み（例：食物摂取の営み）であり、これが発動する力である。また社会のシステムでいえば均衡状態に抗して欲望エネルギーを〈付加〉する作用であって、これが発動する力である。ただし、こうしたエネルギーは発動するに至るまではシステムに潜在している。噴火の前の火山の静けさのように。地震の前の断層の静けさのように。このようにエネルギーに満ちてはいるが、それが潜在しているシステムのベースは〈飽和体 le corps plein〉と呼ばれる¹⁴。「それらの

9 ここは「数学的用語」として英単語を用いた。

10 ここでは「均衡化力」の進行（強度の低下）を分かりやすく「直線的」なものとして表現したので、三者は全体として簡潔な三角形をなしている。だが強度の低下は「半減期的」「漸近的」であることも考えられる。ここでの三角形はあくまでも簡潔な模式化をめざしたものである。

11 「均衡化力」は、本文中にも述べたように、ドゥルーズ＝ガタリの明示的な概念ではなく、筆者が補ったものである。だが、実はそれは「現実に発現する力」「生産力」としてドゥルーズ＝ガタリのいう〈生産 production〉という概念に事実上重なる概念である。のちに述べるように、それは〈主体〉が発揮する力でもある。既出拙稿（2016）、26頁。

12 ①②はまさにドゥルーズ＝ガタリがいう「反発力と誘引力という … 二つの力が対峙するところ」である。

13 「反発力」という名称は、「誘引力に抗う」ことをいうものであろう。

14 人文学界では広く一般に「無器官体 le corps sans organes」を「器官なき身体」に、「飽和体 le corps plein」を「充実身体」に邦訳している。しかし筆者はシステム学者（systemician）として、これらの邦語にもっと自然科学的システム学への接点を与えたいと考えた。「無器官体」については、Bernd Schwibs によるAOの独訳（Suhkamp, 1977）が „der organlose Körper“ という訳語を採用しており、「無器官体」

諸強度は、無器官飽和体を示す「強度＝ゼロ」の状態から発動し」という上記〔引用文 A〕の表現は、こうしたシステム作動の前提条件を指している。

そして〈反発力〉は〈強度〉(＝上記「図 1」での $|\vec{r}|$ 、絶対値としてつねに正)をつくりだす力でもある。ただし〈反発力〉が停止したのちにも〈強度〉は残り続け、(のちの「図 2」で見ると)〈誘引力〉によって時間とともに消費され減じてゆく。だからこそ〈強度〉は、「反発力と誘引力という先にあげた二つの力に由来し、この二つの力が対峙するところから生まれてくる」ことになるわけだ。そして〈強度〉は、〈反発力〉や〈誘引力〉のような「力」(ベクトル)ではなく、純粋な「量」(スカラー)である。

無器官体と器官諸機械

〈無器官体〉は、そうした反発力によるエネルギー発動をその「表面 surface」に許容しつつ、かつそれに対してエネルギーを消費させ、これを「強度＝ゼロ」へと(すなわち「均衡」＝「死」へと)誘引し拡散させようとする。無器官体のこの力が〈誘引力 \vec{a} 〉の正体である¹⁵。だからこそ〈誘引力 \vec{a} 〉は〈無器官体の表面〉に存在する力なのであり、また宇宙が出現した時から作動する根源的・普遍的な力(≒エントロピー増大の力)なのである¹⁶。この力に〈反発力 \vec{r} 〉が作用して「強度＝プラス」が現れると、誘引力はそれをそのつど「強度＝ゼロ」へ引き込む方向へ作用するのだ。

〈欲望機械群〉すなわち〈器官諸機械〉が発動する〈強度〉は、こうした〈誘引力〉による減衰を免れることができない。まさにこれは宿命なのである。〈強度〉が出現すれば、そこにはどこからともなくやってくる〈無器官体〉が必ず「覆いかぶさり」、これをその〈誘引力〉によって「みずからのものにする」のである。

「時間性」の導入

「反発力と誘引力」の対立は、言葉の上では「磁石の N と S」(斥力と引力)のような正負「対称的」な相反力に聞こえ、〈誘引力 \vec{a} 〉は〈反発力 \vec{r} 〉に対して「180 度逆方向」へ向かう「マイナス力」を想像させる。だが実際はそうでない。現実には、〈誘引力〉は「図

との邦語はこのニュアンスに近いといえるだろう。「飽和体」という筆者独自の訳語もシステム学的願望を表現したものだが、ここでの「飽和」はむしろ「過飽和」の状態であると考えた方がよい。それは、飽和しているにもかかわらず「強度」を析出していない状態(事実上の「強度＝ゼロ」)である。システムはそのような状態から〈反発力〉によって発動するのである。

15 筆者がここで“attraction”の語にこれまでの論者によって使われてきた「吸引力」という訳語を採用せず「誘引力」としたのは、それがシステムを「死(＝均衡)」へと向かわせる広大で普遍的な力だからなのであり、どこか一定の「場所」「地点」で何かを「吸い込む」ような、ブラックホールのような力(強力なマイナス力)ではないからである。むしろ逆に、それはおよそ存在するものを宇宙の広大無辺へと拡散させてゆくような力である。これを「死の誘惑」という意味合いを込めて「誘引」としたのである。

16 ドゥルーズ＝ガタリは書いている、「この無器官飽和体は、非生産的なもの、不毛なもの、発生してきたものではなくて始めからあったもの、消費しえないものなのである」(AO、市倉訳 20 頁、宇野訳上巻 26 頁、訳語変更。下線は引用者)。

1] に見られるように〈反発力〉に対していわば「90度」の方向に向かう力なのである。したがって誘引力にマイナスの値はなく、しかも誘引には時間がかかる（エントロピー増大は時間の経過の中でしか起こらない）から、結局〈強度〉はゼロにならないのである。よって誘引力はつねに「強度＝ゼロ」の横軸上に（無器官体の表面上に）展開し、それが上記「図1」でいう右側へ向かうという方向性は、実は「時間性（ t ）」を表している。「図1」の横軸は「時間」を表していると見てもよいことになる（図2）。

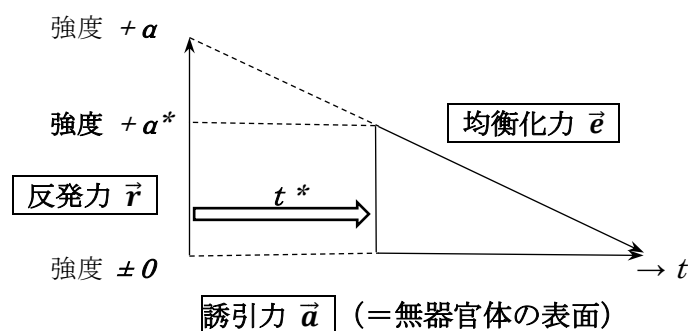


図2：誘引力、反発力、均衡化力の三者関係と時間の経過

（ t^* は時間の経過をあらわす）

これに対して、〈反発力 \vec{r} 〉は「図1・2」の縦軸方向にのみ作動する。したがって反発力そのものには時間性（ t ）の概念は関係してこない。反発力は、いつでも任意に（だから②で「たまたま」と表現した）、新たな第三項として、注入可能なのである。

そして「反発力と誘引力」の両者のせめぎあいの中に生み出される力（ $\vec{a} - \vec{r}$ ）、すなわちシステムが実際に作動する「生命の力」、それこそが（筆者が補った）〈均衡化力 \vec{e} 〉なのである。この意味で、均衡化力にも時間性（ t ）の概念が含まれる（生命の「過程」）。そしてこの「均衡化力」こそが、「主体」と呼ばれるものの発揮する力の正体なのだ、と筆者は考えている。

逆に、反発力が注入されなくなれば、時間の経過（上記の「図2」の t^* ）とともに均衡化力によって強度が消費され、強度の値は低くなっていく（図2の $+a^*$ 。これらはつねに正の値をとる）。こうして「強度」つまり上記「図2」のタテ軸の a の値は、先の〔引用文A〕にいうように「原因となる誘引力と反発力の比率に応じて、相対的に上下する」のである。

再確認しておく、〈誘引力・反発力・均衡化力〉は「力」であって「ベクトル」として扱われるべき概念である。つまりそれぞれが固有の方向性をもつ力であって、「図1・2」では、「矢印」としてこれを表している。これに対して〈強度〉は「スカラー」であって「力」ではない（いわば「生命のポテンシャル」であり、それは過程としてあらわれる力ではな

い)。それは「位置の差」としてあらわされる、いうならばタテのポテンシャル・エネルギーである。その意味での〈強度〉の反意語は〈強度＝ゼロ〉、すなわち〈均衡〉である（有効エネルギー＝ゼロ）。そして均衡化力は、ひとたび反発力が注入されたのちには、このポテンシャル・エネルギーを消費しつつ作動することになる。

器官諸機械と生産の連結 ～ 「オープンな数列」

さて、以上のような認識を前提とすれば、「誘引力、反発力、均衡化力」の三者からなる関係をヨコに連結させて、ひとつひとつが「強度の諸項」からなる一連の「数列」（あるいは、それらの「和」であるところの「級数」）をつくることができる（図3）。

〔引用文A〕にいう、「誘引力と反発力の対抗は、すべて正の値をもった、強度の諸項からなるオープンな数列を生み出す」という表現は、このような連結関係を意味している。そして、こうして器官諸機械が相互にヨコに〈接続〉することが「欲望機械群」（＝器官諸機械の連結、つまりリズム）が形成されてゆく¹⁷最初の端緒を与えるのである。

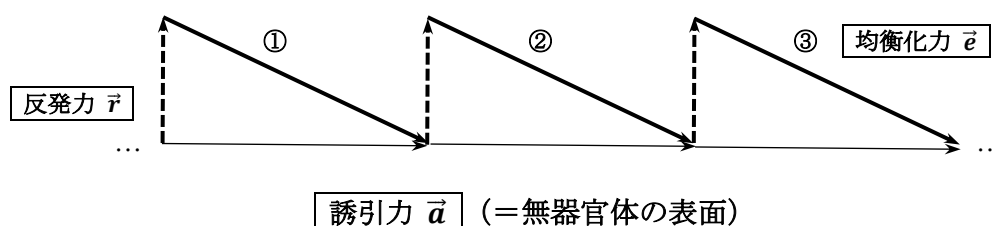


図3：諸強度とその連結

ここで確認しておく、上図の … ①→②→③ … の連結関係は、ひとつの主体内の内部体験であっても構わない。〔引用文A〕の「ひとつの主体は、次々この個々の状態を体験し通過してゆくのである」という表現は、むしろこの連結が「主体」の内部に体験される場合の方を念頭に置いているとあってよいであろう。

当然のことながら、このような「数列」が維持されるためには、連結時に適宜〈反発力〉がシステムに注入され、〈強度〉が補充され、そのことでエネルギー論的開放系が維持されなければならない。さもなければ、システムはエネルギー注入を遮断された閉鎖系になり、閉鎖系はいずれ均衡状態に到達して停止するはずである。

「オープンな数列」とは、こうしたヨコの連結関係には限りがなく、論理的には無限に連結が可能であることを意味している。また、「これらの諸項は、決してひとつのシステムの最終的な平衡状態を表わすものではなく、むしろ無数のメタ安定的な定常状態を表現して」いる

17 こうした「器官諸機械の連結」を社会システムにおいて「諸商人の連結・接続」に応用し、「商人機械」としての展開を試みたのが、拙著『欲望するシステム』（ミネルヴァ書房、2009年）の第3部である。

というのは、これらの連結が最終的な「均衡状態」（強度＝ゼロ）を呈することはなく、エネルギーを消費しつつ・強度を上下させつつも、ほぼ一定のレベルで定常的に「強度＝プラス」の状態を維持しつつ推移することを示している¹⁸。これが「無数のメタ安定的定常状態」の含意である。このことは、「生命の持続」をも意味することになる。繰り返しになるが、それは決して「均衡状態」ではない。

実は、器官諸機械による〈生産〉とは、こうした「生命＝主体が発揮する力」そのもの、つまり〈均衡化力〉の連続的発現のことであり、「図 3」における太実線矢印の個々の①②③…に相当するものである（しかもそれらは同時にエネルギーの〈消費〉でもある。何ものかの生産は必ず何ものかの消費を伴うのだ。そしてエネルギーにおいては一般に「消費量>生産量」となる）。これらは、河川が流れ下る際に発揮する水力のように、実際に〈仕事 Work〉を行ないうる力¹⁹であって、だからこそ「生産的」なのだ。また、ドゥルーズ＝ガタリのいう「生産する機械群」とはそれらの無限の〈接続〉ないし〈連結〉のこと²⁰であって、図 3 の …→①→②→③→… の連続に相当する。これらの連続が〈無限のリゾーム〉を構成してゆくことになるわけだ。

3. 若干の照合

さて、以上のように「システム学的に」かつ「図式的に」把握された諸概念であるが、これはドゥルーズ＝ガタリの非常に限定的な短文の解釈に立脚したものにすぎない。本節では、冒頭の〔引用文 A〕（それは最も重要な手がかりを有する箇所であったのだが）以外の箇所から、若干の重要と思われる記述に着目し、意味的な照合を試みる。

ところで、筆者は本稿において意図的に「システム学的な立場」からの解釈に努めたわけであるが、ドゥルーズ＝ガタリ自身が「システム学的な立場」で考察したのでないことも明白である。したがって両者の立場やそれに由来する表現に齟齬があったとしても無理からぬことである。そこには「立場上相容れない」場合もあれば「思想的未熟」によるものもある²¹。筆者自身の立場は「ドゥルーズ＝ガタリに触発されたシステム学的社会理論の構築」であって「ドゥルーズ＝ガタリの訓誥学」ではない。その意味ではドゥルーズ＝ガタリのテキストを、システム学的観点から意図的・自覚的に曲解することがあってよい

18 拙著『欲望するシステム』（ミネルヴァ書房、2009年）では、このことを「落ちながら上昇する」と表現した。同書 148 頁。

19 ここでの〈仕事 Work〉については、「ジュール ($J=N \times m$)」や「キロワット時 (kWh)」など（初学者にとっては「kg 重 m」など）といった「エネルギー」の次元をもつ物理量を想起していただきたい。

20 連結 *couplage* は生化学でいう「共役」のことでもあることを指摘しておきたい。この場合の「共役」とは生化学反応がエネルギーの授受を伴いつつ連結して生じることをいう。

21 「注 7」を参照されたい。もっとも彼らは「構造主義」の思想を経由していることから、それを介してシステム思考を取り入れてもいる。

と考えている²²。

反発力の出現と誘引力との関係

まず、「欲望機械群」と「無器官体」との間の〈反発力〉がどのように現れるのか。ドゥルーズ＝ガタリ自身の記述を見よう。

欲望機械群と無器官体との間に、明白な闘争 (un conflit apparent) がまき起こる。諸機械の接続、機械の生産、機械のノイズ、いちいちの場合にそれらは無器官体にとって耐えがたいものとなるのだ。〔市倉訳 21-22 頁・宇野訳上巻 27 頁にもとづき改変 / AO, p.15〕

ここでは、〈無器官体〉を擬人化して描き、無器官体の側が欲望機械群に対していわば「プレート境界」のように反発力を蓄積してゆく様を描いている。その結果、

… もろもろの〈器官諸機械〉にむけて、無器官体はすべすべして不透明な、はりつめた自分の表面をこれらの器官諸機械に対抗させる。… 根源的といわれる抑圧はこれと別の意味を持っているとは思われない。つまり、それは … 無器官体による欲望機械へのあの反発を意味しているのだ。そしてパラノイア機械はまさにこのことを意味している。

〔市倉訳 21-22 頁・宇野訳上巻 28 頁にもとづき改変〕

(飽和体は)あらゆる生産の上に折り重なり、生産力と生産の担い手とが分配される表面を構成するのである。… 生産力と担い手とは、奇蹟のような形をとって、飽和体の力そのものとなる。この両者は、飽和体によって奇蹟を授けられたように見えるのだ。

〔市倉訳 23 頁・宇野訳上巻 29-30 頁にもとづき改変〕

ここで〈反発力〉は、原初的には〈無器官体〉の側から発動されるものだと表現されている。しかしシステム学的には〈器官諸機械〉の方が(無器官体に対して)〈反発力〉をもつと解したい。実際、以下のような記述が見受けられる。

無器官体は欲望的生産に折り重なり (se rabat sur)、これを引きつけ、これを自分のものにする (se l'approprié)。器官諸機械は、無器官体にしがみつくと (s'accrochent sur)。… こうして誘引機械 (une machine d'attraction) が、反発機械 (la machine répulsive) の後に続き、あるいは続きうることになる。つまり、パラノイア機械 (la machine paranoïaque) の後に、奇蹟を行う機械 (une machine miraculante) が続くことになる。しかしここで「後に」とは何を意味しているのか。むしろ二つの機械は共存している。

〔市倉訳 24 頁・宇野訳上巻 31 頁に基づき一部改変。傍点引用者 / AO, p.17〕

ここでは、「反発力が先行し、誘引力が後続する」、という「力の順序関係」が問題にさ

22 よく言われているように、彼らの文体それ自体がもともと分裂症的で、読者に「このように読め」と要求していない。読者の数だけ読み方があってよいのである。

れ、さらに「力関係」だけでなく、「〈反発機械＝パラノイア機械〉→〈誘引機械＝奇蹟を行う機械〉」という「機械の順序関係」をも問題にしている²³。そしてその二つの力、二つの機械は実際には共存しているというのである。もともと、〈誘引力〉は宇宙の歴史とともにある、もっとも始原的な力、モノゴトをバラケさせる力である。しかしその力は〈反発力〉がなければ潜在しており、これが実際に発動するためには、そもそも〈反発力〉が発動されなければならないのである。こうして両者は共存することになるのだ。

主体の登場

二つの力・二つの機械のこうした対立・共存の中から、第三の、新しい機械が生じてくるとドゥルーズ＝ガタリはいう：

私たちは、… 主体というものがいかにして生み出されるのか、考察しなければならない。私たちは欲望機械群と無器官体との間の対立から出発した。根源的抑圧のパラノイア機械において現われていた両者の反発の関係は、奇蹟を行う機械においては誘引の関係に代った。しかし誘引力と反発力の間にはあいかわず対立がある。この間にほんとうの和解が実現されるのは、… 新しい機械の次元においてでしかないように思われる。

[市倉訳 30 頁・宇野訳上巻 42 頁に基づき一部改変。傍点引用者 / AO, p.23]

ここでは〈主体〉がいかにして生み出されるのかを問題にしている。そして主体は、反発と誘引との対立の間に、両者の和解を実現すべく「新しい機械の次元において」現れるという。この新しい主体、新しい機械はのちに〈独身機械〉と呼ばれることになる。

パラノイア機械と奇蹟を行う機械に続いて新しい機械が現われる。この新しい機械を示すために、〈独身機械 machine célibataire〉という名前を借りることにしよう。この機械は、欲望機械群と無器官体との間に新しい縁組を実現し、新しい人類を、あるいは輝かしい有機体の誕生をうながすのである。

[市倉訳 31 頁・宇野訳上巻 43 頁に基づき一部改変。傍点引用者 / AO, p.24]

〈独身機械〉は〈パラノイア機械〉と〈奇蹟を行う機械〉に続く第三の機械であり、〈主体

23 ここでいう〈奇蹟〉という宗教的用語は、仲正昌樹氏が指摘するように、もっともよく知られた分裂病患者「シュレーパー控訴院長」の体験を指していると考えられる〔仲正昌樹『ドゥルーズ＋ガタリ〈アンチ・オイディプス〉入門講義』作品社、2018年、54頁〕。すると、〈奇蹟を行う機械〉は〈分裂症機械〉と解してもよさそうだ。こう見れば、ここでいう「反発機械」と「誘引機械」との対立は「パラノイア的な抑圧」と「スキゾフレニー的な分裂」との対立に置き換え可能だと見えてくる。そして、分裂者の方こそが〈自然人 *Homo natura*〉だったのである (AO, p. 11, 28)。

なお、仲正氏は従来「ドゥルーズ＝ガタリ」(ないし「ドゥルーズーガタリ」と記されてきたふたりの連名を、上記著書のタイトルに見るように「ドゥルーズ＋ガタリ」と記し、本文中もそれで通している。この「＋」の記号には、彼らの著作が二者の共作であってそれぞれの単独ではなしえなかったことを示す、という周到な意図が感じられるが、筆者としては、「そこまでやるならば」、「ドゥルーズ＋ガタリ」という線型的(和的)な表現ではなく「ドゥルーズ×ガタリ」という非線型的(非和的)な表現の方がいいのではないかと思ってしまうが、いかがだろうか。

機械)と呼んでよいものである²⁴。そして：

… 独身機械は何を生産するのか。独身機械を通じて何が生産されるのか。その答えは強度量 (des quantités intensives) の生産であるように思われる。

[市倉訳 32 頁・宇野訳上巻 44 頁に基づき一部改変。傍点引用者 / AO, p.25]

反発力・誘引力は「力」(ベクトル)であったが、強度は「量」(スカラー)であることがここで分かる。そして「強度」を生産するものとして〈独身機械〉が示されている。そして独身機械は〈主体〉の秩序に属するものであった。この「主体」が、「無数のメタ安定的な定常状態 … を体験し通過してゆく」ことになるわけだ。そしてその主体の行動は、「強度」を前提とした「均衡化力」に由来するものなのである。

4. 結語

総括

本稿で試みたのは、ドゥルーズ＝ガタリの長大で難解な所論の中らごくごく一部を抽出し、しかも「誘引力、反発力、均衡化力、強度」という四概念に限定して「システム学的」観点からなされた「図式的解釈」であって、それもあくまで解釈のひとつの「候補」にすぎない（「均衡化力」は先にも示したようにドゥルーズ＝ガタリの明示的な概念ではなく、筆者が仮設した図式に補った「補助線」である）。だが、引用した箇所はごく短いものの、これらの概念は彼らの所論の中のいたるところにあらわれ、それらはかなり一貫した意味を保持している。そしてそれらはシステム学的観点からして有用な示唆を与えるものであり、ここでの「図式的解釈」はシステム学に対し一定の貢献を果たすものと筆者は信じている。

勾配という概念

なお、ドゥルーズ＝ガタリのいう〈無器官体〉には、「誘引力、反発力、強度」のほかに、システム学上重要なもうひとつの概念が帰属されている。それは〈勾配 gradient〉という概念である。ドゥルーズ＝ガタリはいう：

無器官体はひとつの卵である。そこには、軸と鬩、緯度、経度、測地線が縦横に走っている。また生成と移行、そこに展開されるものの行き先を印づける勾配がいたるところにある。ここには、何ひとつなにかを表象するものはない。ここではすべてが生であり、生きられている。

[AO、宇野訳上巻 45-46 頁、訳語変更。下線引用者]

24 「注 23」での考察を念頭におくと、この三つの機械は「(パラノイア機械) → (分裂症機械) → (主体機械)」の順に推移するごとくに論じられている。

〈勾配〉とは、文字通り「そこに展開されるもの（つまり連結・伸長・編制してゆく〈欲望機械群＝リゾーム〉）の行き先を印づける」ものである。つまり〈勾配〉とは、欲望機械群＝リゾームの発達・分化・編制、すなわち自己組織化を誘導する因子（成長因子）の、いわば「濃度勾配」をあらわすものである。これは「誘引力、反発力、強度」といった「エネルギー論的」な概念とはまったく別の次元に属する量である。それはまた、ドゥルーズ哲学において〈差異〉を表す典型的な概念でもある²⁵。したがって〈勾配〉については新たに別の稿を起こして別の論を展開しなければならない²⁶。

おわりに

ドゥルーズ＝ガタリの諸概念はみな多義的であり、それらの各面が高次元の意味空間内で相互に繋がりあって、いわば複雑な「高次元多面体」つまり「多様体」をなしている。ここでの試みはそれらを「システム学的」かつ「図式的」な観点から切り開いて分かりやすい低次元に落とし込んだ、いわば「展開図」なのだと言ってよいかもしれない。だから本来関連しあっているはずの複数の意味や概念間の関係が今回切り離されていてもそれはむしろ当然なのである。たとえば〈主体〉あるいは〈独身機械〉という概念は、ドゥルーズ＝ガタリにとって、もともとは〈接続 *conjonction*〉という「総合の様式」と密接に結びついているものだ。また、〈強度〉はドゥルーズの主著『差異と反復』でのキーワードのひとつであって、たとえば「外延（延長）」の概念と密接に結びついている²⁷。今回はそれらの関連性をあえて論じていない。〈反発力〉や〈誘引力〉にしてもしかりである。今回は「ひとつの解釈」として諸概念の多義性や多くの関係を独自の観点からあえて切り離し・切り出して、ひとつの簡潔な展開図として呈示してみたわけである。それゆえ、本稿とは別の展開図を導く方法も当然に存在するだろう。それぞれの論者がそれぞれの観点から様々な試みをなしてよいのである。

25 〈差異〉はドゥルーズ思想の鍵概念のひとつである。ドゥルーズ研究者の檜垣立哉氏は、ドゥルーズのこの「差異」概念について以下のように述べている：「… ドゥルーズの差異の概念には、流れにはらまれている微小な差異をきりわける微分 (*différentiel*) と、流れにはらまれる差異が自己展開を遂げて姿をあらわす分化 (*différenciation*) という 2 つの主題とが、緊密に関連する。ドゥルーズの差異とは、『差異と反復』での *différenciation* (微分/分化) という両義性を含ませた表記によってこそ、十分に表現しうるものなのである。ドゥルーズにおいて差異とは、未決定的な見えない力 (潜在性) を示す微分という装置と、未決定的な力が現実化して姿を現す分化において描かれうるのである。未分化な質料として力をはらむ卵細胞が、さまざまな細胞や形態へと多様に生成していく光景が、ドゥルーズの差異概念の根底にある」と [檜垣立哉「「差異」の差異 —— ドゥルーズとデリダ ——」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 28 巻、2002 年 3 月、86 頁]。微分とは結局のところ「傾き」を導出する操作であり、これは〈勾配〉のことにほかならない。また、生きたシステムはその発生過程でその形態形成あるいは〈分化〉に際し成長因子 (Growth Factor; GF) の濃度勾配に多くを拠っている。しかもその際、「濃度」そのものよりも「濃度の勾配」(つまり濃度の差異) の方が重要であることが知られている。濃度それ自体はきわめて微量であってよいことが多い。

26 既出拙稿 (2016)、25-26 頁では短いながらもこうした論を展開している。あわせて参照されたい。

27 G. ドゥルーズ (財津理訳)『差異と反復』(河出書房新社、1992 年)、335 頁、347-370 頁などを参照されたい。

付 録

本稿の〔引用文 A〕について、以下にドゥルーズ＝ガタリの原文とその訳文を掲げておく。

【原文】

D'où viennent ces intensités pures? Elles viennent des deux forces précédentes, répulsion et attraction, et de l'opposition de ces deux forces. Non pas que les intensités soient elles-mêmes en opposition les unes avec les autres et s'équilibrent autour d'un état neutre. Au contraire, elles sont toutes positives à partir de l'intensité = 0 qui désigne le corps plein sans organes. Et elles forment des chutes ou des hausses relatives d'après leur rapport complexe et la proportion d'attraction et de répulsion qui entre dans leur cause. Bref, l'opposition des forces d'attraction et de répulsion produit une série ouverte d'éléments intensifs, tous positifs, qui n'expériment jamais l'équilibre final d'un système, mais un nombre illimité d'états stationnaires métastables par lesquels un sujet passe. (AO, pp. 25-26)

【英訳】

Where do these pure intensities come from? They come from the two preceding forces, repulsion and attraction, and from the opposition of these two forces. It must not be thought that the intensities themselves are in opposition to one another, arriving at a state of balance around a neutral state. On the contrary, they are all positive in relationship to the zero intensity that designates the full body without organs. And they undergo relative rises or falls depending on the complex relationship between them and the variations in the relative strength of attraction and repulsion as determining factors. In a word, the opposition of the forces of attraction and repulsion produces an open series of intensive elements, all of them positive, that are never an expression of the final equilibrium of a system, but consist, rather, of an unlimited number of stationary, metastable states through which a subject passes.

(*Anti-Oedipus*, translated by R. Hurley, M. Seem, and H. R. Lane, Penguin books, p. 19)

【市倉訳】

では、これらの純粋なる強度はどこからやってくるのか。これらの強度は、反撥と吸引という先にあげた二つの力に由来し、この二つの力が対立するところから生まれてくるのだ。ところが、そうはいても、種々の強度そのものは相互に対立しながら、中和状態を望んで均衡をめざしているのではない。そうではなくて逆に、それらの諸強度は、器官なき充実身体を示す〈強度＝ゼロ〉の状態を起点として、すべて正の値をもっている。ただし、その値は、強度自身の相互の複雑な関係に応じて、また強度の原因をなす吸引と反撥との力の比率に応じて、相対的に上下する。要するに、吸引と反撥との力の対立は、すべて正なる値をもった、一連の開かれた諸強度の境域を生み出すのである。これらの強度の境域は、決してひとつの体系の最終的な均衡状態を表現しているものではなくて、むしろ無数の準安定的な個々の停止状態を表現しているものなのである。ひとりの主体は、次々とこの個々の状態を体験し通過してゆくのである。(市倉訳 32-33 頁)

【宇野訳】

それなら、これらの純粋な強度はどこからくるのか。これらは反発と吸引という先にあげた二つの力に由来し、この二つの力の対立から生まれてくるのだ。そういっても、もろもろの強度そのものは相互に対立しながら中和状態のまわりで均衡しているわけではない。それどころか、それらの諸強度は、器官なき充実身体を指示する「強度＝ゼロ」の状態を起点として、すべて正の値をもっている。ただし、その値は、諸強度自体の複雑な関係に応じて、また強度の原因となる吸引と反発の比率に応じて、相対的に上下する。要するに、吸引力と反発力の対立は、すべて肯定的な、強度の諸要素の開かれた系列を生み出すのである。これらの要素は、決してひとつのシステムの最終的な均衡状態を表現しているのではなく、むしろ無数の準安定的な停止状態を表現し、一つの主体は、次々とこれらの状態を体験し通過してゆく。(宇野訳・上巻、45頁)

【拙訳】

では、これらの純粋な強度はどこからやってくるのか。これらは先行する反発力と誘引力という二つの力に由来し、この二つの力が対峙するところから生まれてくる。だが、もろもろの強度そのものは相互の対立の中で中立状態の付近に均衡（平衡）するのではない。それどころか、それらの諸強度は、無器官飽和体を示す〈強度＝ゼロ〉の状態から発動して、すべて正の値をとる。ただしその値は、諸強度自体の複雑な関係に応じて、また強度の原因となる誘引力と反発力の比率に応じて、相対的に上下する。要するに、誘引力と反発力の対抗は、すべて正の値をもった、強度の諸項からなるオープンな数列を生み出す。これらの諸項は、決してひとつのシステムの最終的な平衡状態を表わすものではなく、むしろ無数のメタ安定的な定常状態を表現していて、ひとつの主体は、次々とこの個々の状態を体験し通過してゆくのである。